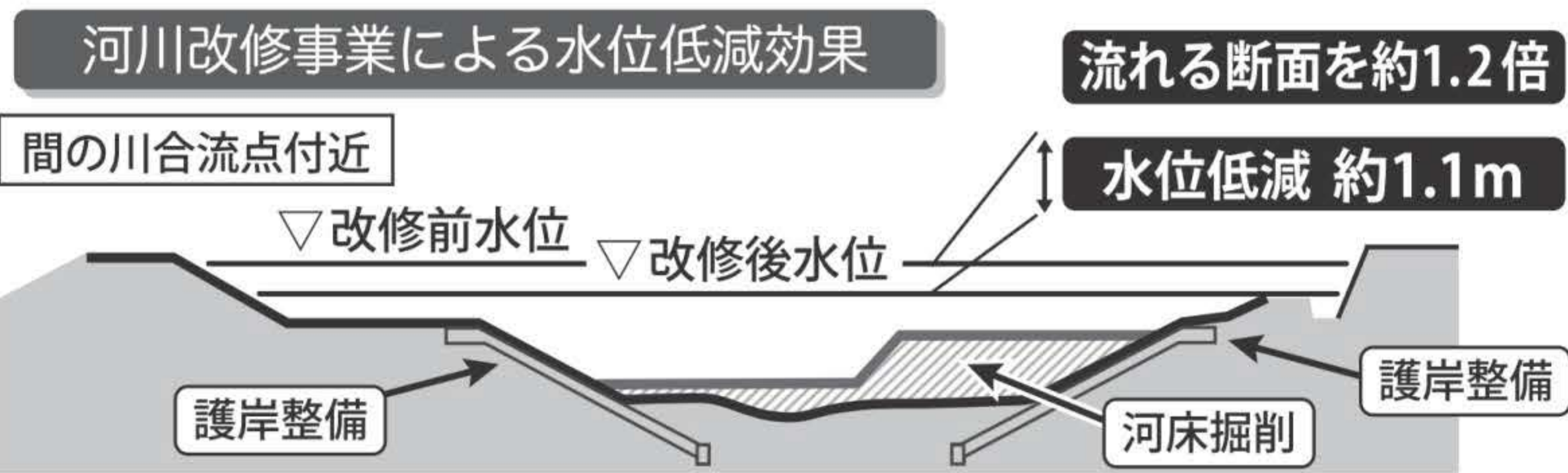




2011年9月3～4日に高砂市、加古川市を襲った台風12号の豪雨災害では、法華山谷川流域で戦後最大となる時間雨量69mmを記録。同川の下流は低地が広がり、近年農地の宅地化が急速に進んでいることから、民家など424戸が床上浸水被害に見舞われた。今後、同規模の大雨に襲われても床上浸水が起きないように、県と市が連携して、地域の安全確保に取り組んでいる。被災時や河川改修工事を振り返りながら、関係者に苦労ややりがい、得たものを語ってもらった。(取材協力=兵庫県建設業育成魅力アップ協議会)

改修が着実に進む法華山谷川。住民、行政、建設業者が意見交換、協力を重ねて安全・安心の地域づくりを行っている=高砂市

台風12号禍で浸水 法華山谷川流域 暮らしを守る治水対策



未来につなぐ
つくるひと・まもるひと

私は、県管理の法華山谷川の河川改修において、測量設計から工事監理までを担当している。具体的には、川幅を広げたり河

高砂市域では、大雨により法華山谷川の水位が上昇し、内水(宅地側の水)が川側へ排水できなくなつたため、浸水被害が生じた。緊急治水対策として、県は川で流すことができる流量を増やし、増水時の水位を下げるため、河川改修を行い、市は内水を法華山谷川へ排出するため、支川・間の川の合流点にポンプ場を建設する。



県加古川土木事務所 復興事業課主任 櫻井 真行氏

効率作業へ仮設計画重視

緊急治水対策はスピード感が求められる。従来の進め方に固執せず、自らも提案しながら住民が求める安全・安心な地域づくりに携われることにやりがいを感じている。

6～10月の増水期は河川内の工事ができないため、限られた期間に効率のよい工事を進めていかなければならない。そのため、仮設計画図作成を重視している。仮設計画図は、工事をどう進めていくかを凝縮した図面であり、工事の工程に大きく影響する。

減災目指して出前講座

災害に強いまちをつくるためハード面の治水対策を行うのはもちろん、被害を小さくするために防災教育や訓練等も備えるソフト面の対策も不可欠。ハード面とソフト面を組み合わせた「総合治水」で減災を目指す考え方を、地元小学校の出前講座などで伝えている。

毎年、工事に着手する前に地域住民を対象とした説明会を実施し、その意見を反映した騒音・振動対策を講じた。工事中に寄せられるご意見やご要望についても、電話で済ませず現場に出向いて真摯に対応することで、工事が円滑に進むことを実感している。



県加古川土木事務所 復興事業課 榎原 悠二氏

豪雨災害時を振り返る山下泰男さん。治水対策が進んだ現在、地区に安心がもたらされている=高砂市米田町塩市



この災害後、15年に塩市地区のハザードマップを作製した。大雨時に土のうを家の周囲に積んだり高台に自動車を避難させたりするなど、地域の自主防災意識も以前より高まっている。ただ、新規転入者は今後も増えるだろうし、想定外の豪雨災害がまた起きるかもしれない。水害の経験を語り、豪雨時の対応を伝えるなど、平常時から地域の防災力向上に努めたい。

高砂市米田町塩市地区自治会長 山下 泰男氏

災害時は高砂市米田町塩市地区の水利組合長として旧来のポンプ場の小屋に夜通し待機していたが、台風襲来と線状降水帯の発生で経験したことのない降雨に見舞われた。この小さなポンプでは法華山谷川への排水が追いつかず暗がりポンプ小屋で足元まで浸水して怖い思いをした。

地元配慮の工事に感謝

04年にも台風23号で床上浸水と道路冠水が発生したことがある。この台風12号では、間の川流域170棟が床上浸水する大きな被害となつたことから県と市が連携し、地元で繰り返し足を運んで治水対策を進めてくれたおかげでようやく安堵できた。排水能力の高い高砂市間の川ポンプ場新設に加えて放流渠と水門も増設され、安心して生活できている。災害時の緊急対応や住宅地が近いことに配慮しながら、迅速に工事を進めてくれた建設業者にも感謝したい。

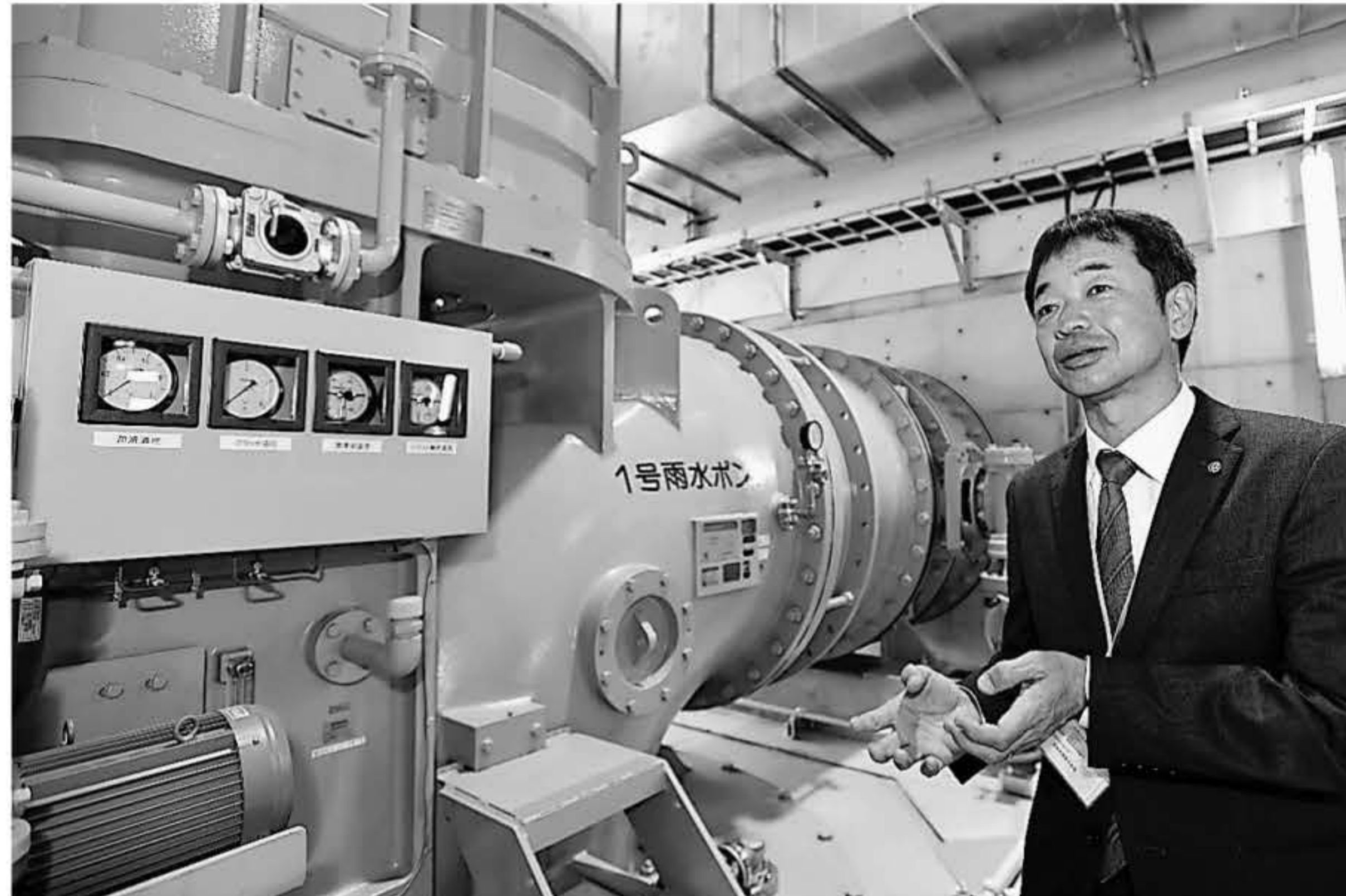
「特集 建設分野の魅力」 第17回

高砂市ではこの災害の緊急治水対策を最優先課題と位置付け、翌12年に治水対策室を新設。私は当初から所属し7年目になる。特に大きな事業となつたのが今年3月に完成した高砂市間の川ポンプ場だ。法華山谷川と市管理の支川・間の川の合流点に、旧来の6倍の排水能力(毎秒6・5立方メートル)があるポンプ場を建設。間の川が増水した場合でも、ポンプで強制的に法華山谷川へ排水できるように、住宅地の床上浸水

高砂市治水対策室長 井上 陽介氏

を大幅に減らせるようになつた。治水対策では地域住民との対話を重視。住民と対話をすればするほどさまざまな課題が見つかったが、地域の特性や災害時の弱点を理解でき、計画に生かすことができた。自分の役所生活の中でもやりがいがある仕事だと思つし、地域住民が安心して暮らせるまちづくりに携われたという大きな喜びを感じている。

住民と対話を重ね計画立案



今年3月の完成した「高砂市間の川ポンプ場」。治水対策において地域住民との対話の重要性を井上室長は実感した=高砂市米田町塩市

必要とされる仕事を

14年から4年間、護岸整備や河床掘削工事に携わることができ、地元建設業者として多少なりとも地域貢献できたかなと思う。法華山谷川の現場は住宅地に近いため特徴。掘削時の土砂崩壊や、振動・騒音に気を配って工事を進めた。また、土砂を頻りに搬入するところから道路汚損対策として現場出入り口にタイヤの洗浄コーナーを設置するなど、住民からのご要望に対応した結果、お礼の言葉をかけられた。ご要望に応えられない場合でも、真摯な態度で丁寧に説明。利益最優先ではなく、住民の意見を反映しながら工事に取り組む大切さを学んだ。

仕事は覚えることも多く、すぐに身につくものではないが、完成したときの達成感は何物にも代えられない。人とのつながりを大切に、良いものをつくっていけば、今後も自分たちを必要としてくれる。それが仕事の充実感につながっていくと確信している。



松陽建設株式会社 松本 一孝氏

社会貢献でき達成感

私は15年に河床掘削、護岸工事を担当した。31歳のとき初めて工事全体を指導・監督する立場で携わった現場なので忘れられない。工事では住民の命や生活のために早く工事を進めたいとはいえ雨量が多い日は無理できないなど河川工事ならではの難しさを実感。それでも、視野を広く持ち周囲とコミュニケーションを図ることを大事にした。工期内に無事終えることができ、達成感を味わった。

阪神・淡路大震災で基礎整備の重要性を感じたのがきっかけで建設業を志し、09年の台風9号の際は佐用町の実家で豪雨災害の恐ろしさを目の当たりにした。建設業界は「3K(きつ・汚い・危険)職場」と言われたが、最近では女性が活躍し、ICT(情報通信技術)の導入が進むなどイメージが変わりつつある。われわれの仕事のやりがいは、人々の生活に関わり、社会に貢献できること。これからもいろいろな現場で経験を積んでいきたい。



株式会社ソネット 加藤 貴広氏